（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

葉山町立葉山中学校

研究テーマ：社会の担い手となる資質・能力を育む探究的な学習の研究

１　実践の目的

・９年間を見通した学校教育目標の設定
・９年間で育む重点目標の設定
・社会の担い手となる資質・能力の育成

小学校４校（長柄・一色・上山口・葉山）・中学校２校（南郷・葉山）の全６校のスケールメリットを生かし、９年間を通して「総合的な学習の時間」（探究学習）に重点を置き、系統立てて児童・生徒の資質・能力を育むことによって、これからの先行き不透明な社会を生きる力を育むこと。また地域との関わり等を通して、コミュニティ・スクールを核として町全体で今後の社会を担う児童・生徒の育成に取り組むこと。

２　実践の内容

２-1.目標等

育てたい生徒像を職員全体で協議し、共有することをファーストステップとして、総合的な学習の時間の目標を各学年で見直した。１学年の総合的な学習の時間については、課題の発見の行い方、生徒の興味関心の高さ、取り組みやすさを踏まえ、次のような形となった。

〇テーマ　「葉山の魅力を発信しよう」

〇育てたい生徒像

・自ら課題を見つけ、それを解決する力
・他者と協同して課題を解決する力
・ドキドキ×ワクワクしながら学べる力

２-2.時間数の確保に向けた工夫

・年間行事の見直し

年間目標を立案するにあたり、課題となったのが、総合的な学習の時間の確保である。この点を補う上で、まず着手したのは、これまで慣例となっていた年間行事の見直しである。これまで秋に開催していた体育祭を春の開催へ移行することで、秋に総合的な学習の時間に集中して取り組める時間を確保した。次いで、１学年で行う年間の３つの行事を見直した。春開催の校外学習を秋に移行し、11 月に行われる職業インタビューと２月の班別学習をそれぞれ、探究的な学びの一助となる活動へ変更した。これにより、これまではそれぞれに独立していた諸活動が一本化され、系統的な学びが可能となった。

教科横断的な連携

次に着目したのは各教科との横断的連携である。本学年の探究学習のテーマが「葉山の魅力を発信しよう」であるため、社会科や理科、英語科との連携を模索した。まずは「地域の魅力」を作文に起こし、スピーチを通して発表、聞いた内容をまとめるという国語科の「書く」「話す・聞く」分野の指導項目と連携することで、教科等とのカリキュラム・マネジメントにつとめた。

２-3.地域人材との連携

地域の魅力を探究していくにあたって、地域のことを深く知る人材からの情報の獲得は不可欠である。そこで、インタビュー対象を地域人材に依頼した。また、「発信する」という点に着目し、「発信の仕方を学ぶ」時間を設けたいと考えた。発信の方法はポスター、新聞、動画、パンフレット、チラシな

ど様々なものがある。しかし本校職員がそれぞれのことに専門的に指導できるとは限らない点を考慮し、それぞれの分野に詳しい人物を選定し、講義をしていただくことになった。

選定にあたっては、職員の人脈に頼るだけでなく、地域の人材発掘の窓口になる人物に依頼をしている。（葉山こどものための人材バンク）これによって人材発掘の教員の時間的な負担を軽減できる。また、葉山町では「開かれた学校」を目指していることもあり、積極的にすすめていきたい。

３　実践の成果

成果

①町行政と連携した学校教育の在り方の再検討

町行政と連携した会議体が設置されたことで、双方の考え（町民の考えを含む）を踏まえた学校教育の在り方を検討できたことは大きい。町全体で児童・生徒を育む土台が作られた。

②葉山町における、向かうべき教育の在り方を共有できたこと

総合的な学習の時間において、探究的な学びを実践していくために、学校教育目標の見直しを行うことができた。全職員で見直す機会を設けられたことは大きく、全職員が同じ目標を見据えて教育活動に臨めることになった。

③年間行事の見直し

総合的な学習の時間における時間数の確保や、学習内容の質の向上に向けて、学校行事や学年行事の在り方自体を再検討できた。これまで、それぞれ独立していた行事の目標や、それに割かれていた時間を調整することで、より効率的に教育活動をすすめられるようになった。また、総合的な学習の時間の年間計画を立てられたことで、職員の準備にかける時間が改善し、指導の見通しがもちやすくなった。

④教科との横断的なつながり

今回は国語科に限定されたものの、各教科の指導項目との横断的な関連を模索する土台ができあがった。

⑤生徒の学びに対する姿勢の変化

課題を身近なものに設定すること、自分たちの住む町の魅力を発信することに対して、普段にも増して意欲的に活動できている。また、生徒から学習方法の提案なども出てきている。（事前に計画のなかった校外での学習の要望があり、臨時的に対応することとした）

４　今後の展開

①学びの在り方を考える時間の確保

総合的な学習の時間の見直しについて、教員間で継続的に協議をする時間を確保したり、外部機関と調整したりする時間の確保が難しい。それは、従来の学校教育現場の業務内容や、時間割の編成にも関わることである。ＳＳＳや校務支援ソフト等で、従来の業務にかける時間の見直しは少しずつ進んでいるようだが、まだ十分とはいえない。学校として、行政として、「本当に必要な教育は何か。」「そのために必要な業務は何か。」「行政でできることはあるのか。」を並行して議論する必要があるだろう。社会の変化に対応する抜本的な業務の見直しと、それに向けた動きが急務である。

②探究的な学びに向かうことの難しさ

生徒の探究心に対して向かい合っていきたいことが多々ある中で、制度面や時間的な制約などで十分に対応できないことがある。生徒の探究的な学びに対する意欲を高いレベルで維持できるよう、綿密な学習計画と、柔軟な対応ができる土台を整えたい。